陸羯南研究の現状と課題
――対外論・立憲主義・ナショナリズム――

片　山　慶　隆※

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　立憲政治論
Ⅲ　対外論研究
Ⅳ　結論

Ⅰ　はじめに

陸羯南は、1857年、陸奥国弘前在府町（現、青森県弘前市）に誕生し、私塾思斉堂、東奥義塾、宮城師範学校、司法省法学校で学んだ後、青森新聞社、紋鼈製糖所を経て、文書局（後に内閣官報局）に勤務した。1888年、官報局を辞職し、新聞『東京電報』を創刊、社長兼主筆として、本格的に言論活動を開始させる。翌1889年、『東京電報』を廃刊させ、大日本帝国憲法発布当日の2月11日に新聞『日本』を創刊して社長兼主筆となり、以来、1891年には主著『近時政論考』を、1893年には『国際論』を出版したほか、主に『日本』の社説を通じて、当時を代表するジャーナリスト・思想家として活発な活動を行ない、大きな影響力を持った。しかし、1904年から体調を著しく崩し、療養生活が増え、1906年には経営難もあって、日本新聞社を伊藤欽亮に譲渡した後、1907年に数え年51歳（満49歳）で死去した。

羯南は、言論活動がほとんど社説の執筆だったため、著作は比較的少なく、また、しばしば政治に偏重した議論とも言われるように、さまざまな分野に精通した包括的な思想家とも言えない。活動期間も、実質的には20年足らずである。しかし、羯南が言論活動を行なっていた時期は、大日本帝国憲法発布、帝国議会

『一橋法学』（一橋大学大学院法学研究科）第6巻第1号2007年3月　ISSN 1347－0388
※　一橋大学大学院法学研究科COE研究員

開設があり、日清・日露戦争が勃発するなど、近代日本の民主主義と対外認識にとって大きな転換点となった時代である。つまり、日本がいかなる道に進むのかを選択する上で、重要な岐路に立った時期であった。近代日本をどのように評価するかは、歴史学界にとどまらず、大きな関心を呼び続けている。そうであるならば、外交・内政に関する論説を数多く執筆して、ナショナリズム、立憲主義、対外認識というきわめて大きな問題について深い考察を行なった羯南は、近代日本を理解する上で依然として重要な思想家であり続けていると言えるであろう。特に羯南は、「保守主義者」として、「現実主義」的な思想を持ちながら、政府に対しては批判的な姿勢を取り、一定の距離を保ち続けたという意味では、近代日本において、はたして別の選択肢があり得たかを考察する上で避けては通れない重みを持つ人物だと考えられる。

本稿の目的は、陸羯南に関する研究史の整理を行なうことで、研究の現状と課題を浮き彫りにして、今後の展望を提示することにある。

陸羯南は、戦後まもなく丸山眞男氏が注目して以来、多くの研究が発表されており、近年もその例外ではない。しかし、研究が厚みを増している一方で、先行業績を十分に消化していないものが散見されるのも事実である。また、重要な論点でありながら、考察が深められていないテーマもあるなど、研究の方向性が定まっているとは言えない状況である。

そこで、本稿では、羯南が主に論じたナショナリズム、立憲主義、対外認識に関する研究を再検討し、課題を明らかとすることで、研究が活性化することを図る。特に対外論研究は、日本が本格的に対外戦争・植民地獲得に乗り出した重要な時期でありながら、他のテーマと比較して研究が遅れている観があるため、重点的に論じたい。もちろん、いずれも重要な問題点であるため、羯南研究者にとどまらず、近代日本を考察する上で示唆するところのあるものにしたいと考えている[1)]。

本稿の構成は以下の通りである。まず、羯南が国内政治で重視した立憲政治に関する研究史を整理し、次に対外論についての研究をまとめる。そして最後に、結論で今度の研究に対する提言を行なった。なお、ナショナリズムに関する研究は数多く、羯南研究におけるキー・ワードの1つと言えるものだが、彼が掲げた

「国民主義」が立憲政治論にも対外論にも不可分に結びついているため、それだけを取りあげることは困難である。便宜上、立憲政治論と対外論の2つに大きく分けたが、当然各節でナショナリズム研究についても評価を行なっていきたい。

Ⅱ　立憲政治論

1　全集刊行以前の研究

羯南は、同時代的にも非常に高い評価を得ていた新聞記者であった。

人物評論の大家であった鳥谷部春汀は、有名な「三新聞記者」の中で以下のように述べている[2)]。すでに福地源一郎、福沢諭吉の時代は去り、現代は陸羯南、徳富蘇峰、朝比奈知泉の時代であるが、政論で最も優れているのは陸羯南であると。また、生方敏郎は「明治30年代に入っては青年は誰も新聞の論説など目を通さなかった。ただ日本新聞の論説と東京毎日の論説だけは権威があった」と、当時を回顧している[3)]。『日本』新聞自体の発行部数は決して多くはなかったが、識見の高さは同時代の人々から一目置かれていたのである。

羯南の死後も『日本』から巣立った記者たちが、いわゆる「大正デモクラシー」

---

1)　なお、本稿では伝記的な研究は特に批判的検討の対象とはしないが、以下に代表的なものを挙げておく。柳田泉「陸羯南」(『三代言論人集第5巻田口卯吉・陸羯南・三宅雪嶺』所収、時事通信社、1963年)、稲葉克夫『青森県の近代精神』第2部（北の街社、1992年。初出は、「羯南聞書」が『弘前大学国史研究』第15・16合併号、1959年、「羯南と徴兵のがれ」が『日本歴史』第187号、1963年、「陸羯南の紋別行―寒帆餘影を資料として」が『弘前大学国史研究』第59号、1972年、「陸羯南の精神的転機にあずかる人々」が『瞬星』第5号、1964年、「羯南とジョセフ・ド・メーストル」が『散歩通信』第8・9号、1978年、「羯南と無神経事件」が『東奥日報』1962年8月29日、「無神経事件の前哨戦」が『陸奥新報』1967年10月15日、「羯南の条約改正論」が『弘前大学国史研究』第7・8号、1957年、「条約改正における井上外交の論理とその支柱的条件の考察」が『弘前大学国史研究』第33・34号、1963年、「羯南と遼東半島還付責任論」が『東奥文化』第36号、1968年)、小山文雄『陸羯南　「国民」の創出』（みすず書房、1990年)、佐藤能丸「『国民主義』陸羯南」(『志立の明治人』下巻、芙蓉書房出版、2005年)。

　近年、鈴木啓孝氏が、青年時代の羯南に関する注目すべき研究を発表している。鈴木啓孝「司法省法学校『放廃社』にみる個人と結社―陸羯南と原敬を中心に―」(『日本思想史学』第36号、2004年)、鈴木啓孝「旧藩の超越―明治10年代の陸羯南を題材として―」(東北史学会『歴史』第106輯、2006年)。

2)　鳥谷部春汀「三新聞記者」(『明治人物評論』、博文館、1898年)。

3)　生方敏郎『明治大正見聞史』(中公文庫、1978年刊。初版は、春秋社より1926年刊)、96頁。

時代を支えたために、高名な新聞記者として記憶されていたが、アジア・太平洋戦争中は、アジアへの領土拡張論を唱えた先駆者というイメージが鼓吹された[4)]。

この羯南像を一変させたのが丸山眞男氏である。まだ戦争の傷跡が残る1947年、丸山氏は「日本型ファシズム」の対極にある「進歩性と健康性をもった」最も輝ける明治時代のイデオローグとして陸羯南を取り上げた。丸山氏は、羯南を「ナショナリズムとデモクラシーの総合を意図した」人物であり、「日本の近代化の方向に対する本質的に正しい見透し」を示したと高く評価し、「五十七年前の『日本』新聞を開くと、右上隅の日本という題字のバックに日本地図の輪郭が書かれているのが目にとまる。その地図には本州、四国、九州、北海道が載せられているだけだ。日本はいまちょうどこの時代から出直そうとしている。そうして現代もまた、まさに新しき『日本』新聞と陸羯南とを切に求めているのではなかろうか」と、敗戦後の日本にも彼のような人物を求めたのであった[5)]。

ここで示された高い評価のゆえか、「ナショナリズムとデモクラシーの総合を意図した」と評された立憲政治論に対する研究者の関心は途切れることなく続き、実に多くの研究成果が発表されている。丸山氏の影響を受けた研究では、羯南の思想に民主主義の「先駆性」を見出すものが目立つ。

例えば、石田雄氏は、国民の側から自らの権利を国家権力に対して主張し、または個人相互間の権利関係を処理する手段として法律を捉える羯南の法理解が卓抜であったことを指摘している[6)]。田畑忍氏も、このような法理解に基づいて明

4） 川邊眞藏『報道の先駆者 羯南と蘇峰』（三省堂、1943年）、吉田義次『國士陸羯南』（昭和刊行会、1944年）。

5） 丸山眞男「陸羯南―人と思想」（『丸山眞男集』第3巻所収、岩波書店、1995年刊。「陸羯南と国民主義」と改題して、明治史料研究連絡会編『民権論からナショナリズムへ』、御茶の水書房、1957年および、丸山眞男『戦中と戦後の間』、みすず書房、1976年に収録。初出は、『中央公論』1947年2月号）。丸山氏は、羯南の全集刊行にあたっても、編纂者とともに、あらためて羯南を称賛しているが、父親の丸山幹治、伯父の井上亀六、親しい関係にあった長谷川如是閑がいずれも『日本』出身だったという少年時代の環境も、羯南について関心が深まった1つの要因であると述べている。丸山眞男・西田長寿・植手通有（座談会）「近代日本と陸羯南」（『丸山眞男座談』第7巻所収、岩波書店、1998年。初出は、『みすず』第112号、1968年）。

治憲法を本質的に把握・解釈したとして羯南を評価した[7]。また、小松茂夫氏は、天皇を政府と国民の調停者と見る羯南の「伝統主義」に彼が持つ限界を指摘しているが[8]、その独立的記者としての活動を高く評価し、羯南の思想と視野と事業はいわゆる「日本主義」よりも、はるかに大きく、広く、遠く、可能性に富むと論じた[9]。

羯南をいずれの機関にも属しない独立の「政論記者」であったこと、品位を落としてまで新聞を商品化することを拒否したこと、道義的な性格だったことを鳥谷部の「三新聞記者」を引きながら称賛したのは、本山幸彦氏である。そして、羯南の人格形成にとっては、現代風の職業意識ではなく、津軽の風土と、儒教の影響が大きかったことを指摘している[10]。小松氏とは異なり、羯南の持つ前近代性にむしろ高い評価を与えたと言えよう。

一方で、主にマルクス主義の影響を受けた歴史家からは、このような高い評価に対して批判が投げかけられた。

岩瀬昌登氏は、実質的権力の主体者として天皇を想定していた羯南の階級基盤は、「人民」にはなく、その「国民」概念は天皇と人民を観念的に結合し、歴史

---

6)　石田雄『日本近代思想史における法と政治』第4章「日本における『合法性』成立過程の一特質」(岩波書店、1976年。初出は、仁井田陞博士追悼論文集編集委員会編『仁井田陞博士追悼論文集第3巻日本法とアジア』所収、勁草書房、1970年)。

7)　田畑忍「陸羯南の政治思想」(『同志社法学』第4号、1950年)。

8)　小松茂夫『歴史と哲学との対話―同時代批判の視座を求めて―』第2章「近代日本思想における伝統主義の問題―日本主義に即しつつ―」(平凡社、1974年。初出は、「近代日本における『伝統』主義―『日本主義』を中心として―」と題して、『近代日本思想史講座第7巻近代化と伝統』に所収、筑摩書房、1959年)。

9)　小松茂夫「陸羯南―『国民』国家における『新聞記者』の使命」(小松茂夫・田中浩編『日本の国家思想』上巻所収、青木書店、1980年)。

10)　本山幸彦「明治の新聞記者―陸羯南」(日本文化会議編『日本におけるジャーナリズムの特質』所収、研究社、1973年)。同書は、1971年11月に開かれた日本文化会議の東西文化比較研究第2回セミナー「日本におけるジャーナリズムの特質」の記録をまとめたものである。第2セッションでの本山氏の報告および本間長世氏の報告「アメリカ民主主義とオピニオン・メーカーたち」をめぐって、本山、本間、芳賀徹、高階秀爾、川中康弘、平川祐弘、坂田吉雄、林三郎、粕谷一希、源了圓、鈴木重信、筑波常治、岩井昭二、田中美知太郎、外山滋比古、鳥海靖、渡部昇一の各氏によって行なわれた討論も、新聞人のモラル、クオリティ・ペーパーと商業化、新聞の影響力などについて興味深い視角を提供している。

の発展に伴う近代的階級観を無視した抽象的なものであったと主張した[11]。羯南に進歩性は存在せず、伝統主義者であると断じられている。また、ひろたまさき氏は、羯南は中小ブルジョワ層の利益を守ろうとしたイデオローグであり、資本主義の矛盾により脅かされる階級的利害を守るために、天皇制国家主義を下から支える論理を構築したと論じた[12]。反動的なナショナリストの要素が強いと見なした古賀鶴松氏[13]、岡和田常忠氏[14]も否定的な評価を行なったものに分類できるであろう。

以上に概観した研究は、天皇観では限界があるが、進歩的なナショナリストであったという丸山氏の示した羯南像に大幅な修正を迫るものではなかった。また、マルクス主義史家からの批判は、「明治時代」に「健全なナショナリズム」を見いだす風潮に警鐘を鳴らすという意味はあったが、事実と乖離した図式的な歴史観を当てはめている印象は否めない。

さらに、肯定・否定いずれの立場に与するにせよ、多くの研究者は戦前に編纂された『羯南文集』と『羯南文録』を使用していたため[15]、史料的な制約も新たな羯南像を打ち出すまでには至らなかった要因であった。

このような研究状況を大きく変えたのが、1968年から始まった『陸羯南全集』の刊行である[16]。明治新聞雑誌文庫で新聞史料の収集・研究に携わってきた西田長寿氏と、陸羯南に関する博士論文を執筆した植手通有氏によって、著作だけでなく、主に『日本』に掲載された膨大な量の論説、書簡、羯南に関する回想など

11） 岩瀬昌登「明治二十年代における伝統主義の性格―陸羯南について―」（『日本歴史』第205号、1965年）。

12） ひろたまさき「陸羯南論―そのナショナリズムの論理―」（『北海道教育大学紀要第一部B. 社会科学編』第17巻第1号、1966年）。

13） 古賀鶴松「陸羯南の政治思想」（『富士論叢』第10巻、1965年）。

14） 岡和田常忠「陸羯南とジョゼフ・ド・メーストル」（『みすず』第112号、1968年）。

15） 梶井盛編『羯南文集』（東京蟠龍堂、1910年）、鈴木虎雄輯『羯南文録』（非売品、1933年）、鈴木虎雄輯『羯南文録』（大日社、1938年）。大日社版の『羯南文録』は74篇の社説を補録として収めている。

16） 西田長寿・植手通有編『陸羯南全集』全10巻（みすず書房、1968～72、75、85年）。各巻の解説・月報も有益である。なお、全集に収録されなかった書簡を紹介したものとして、梅溪昇「陸羯南宛犬養毅・井上毅・近衛篤麿・内藤鳴雪の書簡―『羯南全集』への補遺―」（『日本歴史』第545号、1993年）がある。

を含んだ重要な基本史料が整備されたことにより、研究が飛躍的に進むことになる。『近時政論考』のような著作はすでに『羯南文録』に収録されていたが、4000篇以上にものぼる社説・随筆のうち、従来の刊行本では『羯南文集』と大日社版の『羯南文録』を合わせても200篇足らずであったことを考えると、この全集の出現は、史料状況において、まさに画期的な変化であった。それでは、全集刊行以後の研究がどのように展開したのかについて、次節で検討していきたい。

2　全集刊行以後の研究

『陸羯南全集』第8巻が刊行され、晩年の社説と書簡・同時代人の回想などを除いて、史料がほぼ完備された1972年以降の研究には、以下のような特徴が見られる[17]。

この時期は、羯南を反動主義者として弾劾するものはもちろん姿を消したが、彼の「先駆性」を評価したり、その「限界」を指摘したりする研究を乗り越え、新しい段階に入った。つまり、限られた著作や論説から断定的な評価を下すのではなく、幅広い史料を読み込んだ上で、羯南の実像に迫ろうという傾向が表れてきたのである。そして、従来から焦点となっていた羯南における近代性・進歩性と伝統との関係が精緻に分析され、研究を深めていったのである。それでは、以下に個別の研究を見ていくことにする。

全集の編集に携わった植手通有氏は、羯南が近代日本の政治思潮を分類し、批評を加えた主著『近時政論考』の詳細な分析を行なった[18]。よく知られているように、羯南は『近時政論考』の中で、自らの立場を「国民論派」あるいは「国民主義」と称したが、植手氏は「国民主義」とは次のような政治的姿勢であることを明らかにした。羯南は、天賦人権論を日本の国情に合わないものと否定したが、

17)　ここでは便宜上、全集刊行以前と以後に分けて研究史の整理を行なったが、全集刊行以前に発表された研究でも、『日本』を史料として直に使用した研究水準の高いものは本項に組み込んだ。逆に全集刊行以後の研究でも、従来のような単純な枠組みを採用しているものは、前節で扱っている。

18)　植手通有「史論としての『近時政論考』」(岩波文庫版『近時政論考』に所収、1972年)。

急進的な民権派の穏和化を図ると同時に、個人の自由を押さえつけ、民権派を敵視する政府の反動的性格を厳しく批判した。そして、日本の独立と発展にとって立憲主義と自由主義は必要不可欠であるが、それを日本の国情に合致して運用できるのは「国民主義」だけだとしたのである。

このように、ヨーロッパ的な制度・思想の直輸入を嫌う態度は、民法典をめぐる論争でも窺うことが出来る。野田良之氏は、羯南は「歴史法学派的な考え方」から慣習法が法の土台であると考えていたため、ボワソナード（Gustave Emile Boissonade）を高く評価しながらも、成文法を重視し、自然法の立場に立つボワソナードの民法典案には不満を持ち、慣習法をもっと取り入れるべきだと主張していたことを明らかにした[19]。

全集刊行以前から『日本』に掲載された社説を読み込んでいた貴重な研究者である松本三之介氏は、優れた論文を数多く発表している。松本氏によると、羯南の「国民主義」とは、国民の対外的な独立と対内的な統一を内容とする「国民的政治」を目標としており、抽象的原則を排して、国民の独立と統一に必要なものはプラグマティックに評価して、合理的な考えに基づき採用する立場であった。羯南は欧化主義についても同様に考えて、採用するかどうかを決定し、立憲制度も進歩も文明も、国民の独立と統一という目標から判断されるので、それらを尊重して自己目的化する勢力とは一線を画していた[20]。

では、「国民主義」によって、立憲政治を正しく運用するためには何が必要であるのか。それは道徳であった。法律を万能と考える法律主義を批判した羯南にとって、道徳論は主として立憲政治に対する運用の原理であった。「国民主義」といっても、制限選挙のもとでは「輿論即議会」ではなく、真の「輿論」を代表するためには、議員の個々人が自己の政治的信念に基づいて行動し、自由独立の思想をもって国家的利益を追求することがモラルとして前提されていたのであ

19） 野田良之「ボワソナードと陸羯南」（『法学志林』第71巻第2・3・4合併号、1974年）。
20） 松本三之介「解説」（松本三之介編『近代日本思想大系31明治思想集Ⅱ』所収、筑摩書房、1977年。後に再構成されて松本三之介『明治思想史　近代国家の創設から個の覚醒まで』、新曜社、1996年に収録）。

る[21]。彼の国民主義は、法律的思考のもとで矮小化された立憲政治論に立憲的道徳論の視点を加えることで、活性化させる意味を持ったというのも同様であろう[22]。松本氏は、羯南の立憲政治は「輿論政治」であり、立憲政治家は、制度を通して制度の向こう側にある国民と常に向かい合い、国民の輿論によって自らの行動を律し、輿論に対して責任を負う心構えが要求されると指摘した[23]。大臣は天皇に対する輔弼という法的責任以外にも、人民に対する政治的責任が強調され、「道義」という政治的モラルは、「憲政の常道」や立憲の慣行と呼ばれる近代議会政を支えている原則やルールを正しく理解する自律的精神と置き換えていい。つまり、理念ではなく、現実的で実際的な政論の必要を主張したのである。それが羯南にとっての「国民主義」であり、国民的統一を実現する際に、国民多数の意思を無視することは許されず、国家主義を厳しく批判したのであった。

以上に紹介した一連の研究で、松本氏は、羯南の「国民主義」が何を意味していたのかを明らかにするという重要な貢献を行なった。国民の独立と統一のために、政府の反動的政策も、民権派の欧化主義も排して、立憲政治を日本の実態に即して運用すべきだという指摘は植手氏と同様だが、松本氏は「道義」というモラルの強調こそが、羯南によるプラグマティックな立憲政治論を理解する鍵であることを示したのである。

丸山氏や小松氏が指摘した羯南の天皇観に見られる「限界」についても、修正を迫る研究があらわれた。坂井雄吉氏は、羯南の明治憲法観は、天皇は主権者ではあるが、絶対的な政治支配者ではなく、いわば建前としての統治権はあっても、「国家権力」は立法・司法・行政の三権で分立が主張され、幅広い層が政治に参

---

21)　松本三之介『近代日本の政治と人間―その思想史的考察―』第4章「明治前期の保守主義思想」(創文社、1966年。初出は、「明治前期保守主義思想の一断面―政治と道徳の問題を中心に―」として、坂田吉雄編『明治前半期のナショナリズム』に所収、未来社、1958年)。

22)　松本三之介『明治精神の構造』第Ⅵ章「国粋主義の国家像―政教社の人びと」(岩波書店・同時代ライブラリー、1993年。初版は、日本放送出版協会より、1981年に刊行)。

23)　松本三之介『明治思想における伝統と近代』第7章「政教者―人と思想―」(東京大学出版会、1996年。初出は、「解題」として松本三之介編『明治文学全集37政教社文学集』に所収、筑摩書房、1980年)。

加できる人民の参政権も要求していたと論じた[24]。「天皇主権論」という表面的には反動的に見える議論が、内実を検討してみるとプラグマティックに立憲政治を運用する主張であったという指摘は、松本氏の研究と同じ流れにあったと言えるであろう。

また、羯南の「保守主義」について考察を深めた米原謙氏の研究も興味深い[25]。「保守主義」は羯南の思想を理解する上で重要な用語であるが、これを松本氏は「官僚的な法治主義化に対する反対思潮」と定義し[26]、植手氏は、「天賦人権論的な風潮の普及、政治的軋轢抗争の社会的底辺への下降といった自由民権期の状況にたいする激しい危機感」という意味で使用している[27]。米原氏は、「保守主義」とは一般的には進歩主義に対するイデオロギー的反動であるとした上で、代表的な羯南研究者である松本・植手両氏の説を修正して、羯南の「保守主義」を「啓蒙主義的合理主義に対する反対思潮」と定義し、彼の反対した啓蒙主義には政府の啓蒙専制主義と自由民権思想の両面があったと指摘した。

当時においては、国家の独立という課題は西洋化抜きにはありえなかったため、必然的に統治構造の近代化を要請し、羯南が擁護しようとした伝統的価値に影響を与えずにはいなかった。それゆえ、米原氏によると、伝統的価値を守るために、羯南は2つの戦略を採った。1つは西欧のインパクトを相対的に過小評価し、近代化を日本の伝統的秩序の自己革新として把握すること。もう1つは政治的領域と他の領域とを峻別し、政治的領域における近代化のインパクトを他の領域にまで波及させないことによって、伝統的秩序の動揺を最小限に限定することであった。

そのため、「輿論政治」は近代ヨーロッパだけでなく、古代アジアにも存在したと主張し、人民の安寧を供給できれば、立憲であろうと専制であろうと良いと

24） 坂井雄吉「明治憲法と伝統的国家観―立憲主義の国体観をめぐって―」（石井紫郎編『日本近代法史講義』所収、青林書院新社、1972年）。

25） 米原謙「日本における近代保守主義の成立とその特質―陸羯南の立憲政論―」（『阪大法学』第104号、1977年）。

26） 松本、前掲論文「明治前期の保守主義思想」。

27） 植手通有「平民主義と国民主義」（『岩波講座・日本歴史16近代3』所収、岩波書店、1976年）。

した羯南の考えは、ヨーロッパの優位性を出来る限り認めないようにする苦肉の策だったと米原氏は分析する。よって、羯南は、固有の文化を破壊することにはきわめて批判的であり、政治的領域では進歩主義を採用したが、その他の領域では伝統的慣習と秩序を擁護した。『万葉集』の再評価を唱えた俳人である正岡子規への援助や家族・道徳観での保守性、参政権を男子選挙権のみ主張したことにもそれがあらわれている[28)]。

「徳義」という前近代的な言葉で立憲政治の運用を図ったという松本氏の指摘は、米原氏による羯南の「保守主義」に関する考察で、さらに理解が深められた。つまり、羯南にとって「徳義」のような伝統的価値を想起させる用語は、一面では非政治的領域における保守性を表したが、他方、立憲政治論における一種の「進歩性」を示した理由がこれで明らかになったからである。現在でも基本的に妥当な説であると考えられ、米原氏の学問的貢献は大きいと言えよう。

以上に見たように、主に植手氏、松本氏、米原氏によって羯南の「国民主義」や「保守主義」に見られる伝統と近代性の関係が明らかにされていくと、進歩性や反動性を強調する研究はさらに減少し、羯南のバランス感覚に注目する議論が目立つようになってきた。

例えば、山本隆基氏は、民権主義の人権思想を受け入れなかった羯南は、兆民と異なり、民主主義の原理的立場を貫こうとする姿勢がなかったとしているが[29)]、個人主義でも国家主義でもなく、政府や民権派のような無原則や原理主義に陥らず、両者をとり込んで、調和を重んじる「適中主義」という第三の道を羯南が選択したことを評価している[30)]。また、佐藤能丸氏は、立憲国家のもとでは、「臣民」ではなく自由な「国民」を主張した羯南には「権利」意識が欠如していると批判

28)　米原、前掲論文。
29)　山本隆基「陸羯南の初期政論」(『広島法学』第6巻第3号、1983年)。
30)　山本隆基「陸羯南の思惟方法」(『広島法学』第11巻第3・4合併号、1988年)。なお、現在、山本氏は、「適中主義」から見た羯南の政治観を総合的に分析した研究を発表中である。山本隆基「陸羯南における国民主義の制度構想(1)〜(6)」(『福岡大学法学論叢』第48巻第3・4号、第49巻第1号、第49巻第2号、第49巻第3・4号、第50巻第2号、第50巻第3号、2004・2005年)。現実の政治過程と羯南の論跡との関連を詳細に分析しており、新しい研究動向を示すものとして重要である。

していたが[31]、肯定的な評価に変化している[32]。ケネス・パイル（Kenneth B. Pyle）氏も、羯南をバランスの取れた健康なナショナリストとして描いた[33]。

澁谷浩氏も、「進歩と保守の調和が必要」と主張し、偏狭な国家主義でも欧化主義でもなく、キリスト教にも穏健な考えを有し、軍備拡張を批判して、自由を重んじる「国民主義」を唱えた羯南の議論に見られるバランスの良さを高く評価した[34]。そして、アントニー・スミス（Anthony D. Smith）氏に倣い、羯南のナショナリズムを「地位の平等な民族の間のドラマに参加し、そこに自らの民族に相応のアイデンティティーと役割を見出すことを求める」複数中心主義的ナショナリズムと定義して、それを「自らの民族に価値と権力が内在している」とする民族中心主義的なナショナリズムとは区別した。バランス感覚を評価する点では前述の研究と同じ流れにあるが、澁谷氏の特徴は、現代の代表的なナショナリズム研究者であるスミス氏の議論を用いて、羯南の「国民主義」をナショナリズム理論の中に位置づけたことである。羯南のナショナリズムについては頻繁に言及されるが、実は理論的なアプローチはほとんど存在しないと言ってよく、その意味では澁谷氏の研究は今後も参考にすべきであると思われる。

1980年代後半からは、羯南が学んだヨーロッパの思想を主にフランス語の原典にまで遡って分析する研究が発表されるようになってきた。この中で、まず注目すべきは、宮村治雄氏である。宮村氏は、羯南がフランスの自由主義思想とドイツの国家主義思想をともに摂取したことが、自由主義に共感を寄せながらも、

31） 佐藤能丸「国民意識の形成―国粋主義における国民像の構想を中心にして―」（鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗』第1巻所収、日本評論社、1982年）。

32） 佐藤、前掲論文「『国民主義』陸羯南」。もっとも、以前は高い評価を行なっていた坂井氏は、「君民共治」によって羯南が天皇・皇室を重視するあまり「国民主義」概念が歪んでしまい、「国民による政治」が「国民のための政治」になってしまう危険性を指摘している。坂井雄吉「陸羯南」（『言論は日本を動かす第4巻日本を発見する』所収、講談社、1986年）。

33） ケネス・B・パイル（松本三之介監訳、五十嵐暁郎訳）『新世代の国家像―明治における欧化と国粋―』（社会思想社、1986年。原著は、Kenneth B. Pyle, *The New Generation In Meiji Japan : Problems of Cultural Identity 1885-1895*, Stanford University Press, 1969）。

34） 澁谷浩「陸羯南のナショナリズム論―政治思想史的考察―」（『明治学院論叢法学研究』第37巻、1986年）。

どちらの思想にも偏ることがないバランスの取れた思想を生んだ要因の1つであると指摘した[35]。羯南は、市町村自治や家族のような伝統的な社会を重要視しながらも、明治維新以降の集権化と合併統合で急速に掘り崩されつつあるという悲しみから、社会の未熟さは認めながらも、社会の側から自由主義の必要を訴えたのである。宮村氏の研究によって、松本氏や米原氏が指摘した伝統と近代性について羯南が持っているバランス感覚は、彼が学習したヨーロッパ思想の影響も大きかったことが明らかにされた。そして、近代思想の影響は、日本の伝統社会が持つ未熟さへの批判的視点も提供したことが示されたが、これは非政治的領域では伝統的価値を擁護したとする米原氏の説への修正を迫るものだと言えよう。もちろん、前述したように米原氏の研究は現在でも妥当だと考えられるが、非政治的領域でもどのような場合は近代化が受容されたのかを探ることは今後の課題として残されている。

他に、英仏語の原典に遡及して研究するという手法を用いた代表的な研究者は、本田逸夫氏と松田宏一郎氏である。まず、本田氏は、一連の研究で以下のような説を主張している。羯南は、伝統を重んじたが、一方で、明治維新には積極的な意義を認め、前近代の封建時代における身分制度を厳しく批判した。また、帝国憲法発布後に自由という言葉に喜んでいる人々の姿勢を戒め、自由は与えられるものではなく、情緒的に好意を抱くものではない。内実を明確に理解しなければならないと論じた[36]。いわば、憲法制定後の「理論の実応用をめぐる苦闘」に、その言論活動の価値があったとする[37]。また羯南は、西洋の文化を「日本化」することを抽象的に考えたが、家族論では保守的・反動的な思想が現れた。しかし、個人と社会の自立を阻害する傾向の深刻化、「勝てば官軍」「人間万事金の世の中」

35)　宮村治雄「自由主義如何―陸羯南の政治思想」(『開国経験の思想史　兆民と時代精神』所収、東京大学出版会、1996年。初出は、溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える［5］近代化像』所収、東京大学出版会、1994年)。

36)　本田逸夫「明治憲法の制定と陸羯南―陸羯南の立憲政論に関する覚え書き―」(『九州工業大学研究報告（人文・社会科学)』第39号、1991年)。

37)　本田逸夫「近代日本の自由観に関するノート―福沢諭吉らをめぐって―」(『九州工業大学研究報告（人文・社会科学)』第50号、2002年)。

という現実追従主義・功利主義の蔓延に危惧を覚え、自由主義の必要を唱えた。権利、自立、平等、平和などに価値を奉する自由主義は愛国心と両立する。前提である国民の統一と独立の達成のためにこそ自由主義は必要とされたのである[38]。

本田氏は、現在のところ最も包括的な研究を発表しており、要約は困難だが[39]、本稿との関連では、自由主義的要素と保守主義的要素を持つ羯南の思想を内在的に理解しようとしたものであり、徳義論などに見られる伝統主義の強調が強さであり弱さと結論づけるなど、先行研究を豊かに発展させ、総合したものということが出来るであろう。

『近時政論考』を典拠とつき合わせて詳細に研究して、特定のヨーロッパの国を準拠国とする「準拠国モデル論争」を批判した「保守主義者」の羯南が、実は最先端のヨーロッパ思想を批判的に摂取することに非常に熱心だったことを明らかにしたのが松田氏である[40]。羯南の主著において、どの部分がヨーロッパ思想の直接的な影響によるものであり、またどこが批判的摂取であったかを分析しており、『近時政論考』研究の決定版とも言い得る学問的貢献を行なった。

また、近年の研究では、山辺春彦氏が、ヨーロッパ思想だけでなく、元老院に勤務していた合川正道の影響から羯南は「徳義」論を展開したのだという説を発表しており[41]、今までにない視点からの研究として注目される。

羯南のナショナリズムは、「欧化と国粋が対立するのではなく、その緊張関係のなかに新たな文化を作りだし、日本のアイデンティティを確立して、政治上の

38） 本田逸夫「陸羯南の『国民的特性』論―その『自由主義』論との関連を中心に―」（『政治研究』第45号、1998年）。

39） 本田逸夫『国民・自由・憲政―陸羯南の政治思想―』（木鐸社、1994年）。なお、同書のもとになった論文には以下のものがある。本田逸夫「陸羯南の政治思想―日清戦前の時期を中心として―(1)～(3)」（『法学』第51巻第1・2号、第52巻第2号、1987・1988年）、本田逸夫「陸羯南の『人道』観に関する覚え書き」（『政治研究』第40号、1993年）、本田逸夫「『立憲政体の冷熱』―陸羯南の立憲政観」（『法の理論』第12巻、1993年）、本田逸夫「陸羯南の立憲政論の展開―日清戦後の時期を中心に」（『九州工業大学研究報告（人文・社会科学）』第41号、1993年）。

40） 松田宏一郎「『近時政論考』考（一）（二・完）―陸羯南における《政論》の方法―」（『東京都立大学法学会雑誌』第33巻第1号、第33巻第2号、1992年）。

41） 山辺春彦「明治立憲政と徳義―合川正道と陸羯南の立憲政治構想―」（『東京都立大学法学会雑誌』第45巻第1号、2004年）。

独立と文化上の特立を実現することをめざしたものであった」と小風秀雄氏は捉え、反近代・反西洋という意味での欧化への反動ではなく、伝統や民族的価値の復権とともに、近代文明国として欧米に認められるものを目指したとしているが[42]、現在の研究状況を正しく反映したものと言えるだろう。

ただし、本節で繰り返し述べたように、羯南の「国民主義」に見られる伝統的要素と近代的要素が、どの程度、彼がその時々に持った現状認識に基づくプラグマティックな戦略によるものなのか、ヨーロッパ思想の学習によるものなのか、親交のあった同時代人の影響によるものなのかは、今度のさらなる研究を待たなければならない。もちろん、米原氏の指摘した政治的領域と非政治的領域の区分にしても、例えば、非政治的領域の中でも伝統的価値が重視されなかったものがあり得るであろう。これらの詳細な分析や、その原因はなぜなのかを突き詰めることも残された課題と言える。

Ⅲ　対外論研究

1　全集刊行以前の研究

前節で見たように、立憲政治論に関する研究の進展により、羯南を極端な反動主義者と見なしたり、伝統主義者としての「限界」を指摘したりする研究はほぼ存在しなくなり、研究は新しい段階に入った。しかし、ここで取り上げる対外論に関する先行研究は、羯南が相互に矛盾するような多くの論説を執筆していることもあり、議論の「揺れ」を反映して、依然としてさまざまな羯南像を打ち出している。まずは前節と同様に全集刊行前後に分けて、時系列的に研究史の整理を行なっていこう。

戦後まもなく、丸山氏の影響を受けて、田畑忍氏は、羯南を人道主義的国家主義者であり、侵略主義的軍国主義とは異なる平和主義的国際政治観を持っていたと評価した[43]。本山幸彦氏も、羯南には、西洋列強のアジア侵略に対する一貫し

42)　小風秀雄「アジアの帝国国家」(小風秀雄編『日本の時代史23アジアの帝国国家』所収、吉川弘文館、2004年4月)、37頁。
43)　田畑、前掲論文。

た抵抗の論理があり、アジアの個性を守りぬかねばならないという強い思想的背景があったとして、日本のみがアジアの強国となる道を選ばず、アジア三国の連帯によってアジアの独立を守り、民族性を守ろうとしたと論じた[44]。また、植手氏も中国分割を批判した羯南の「平和主義」を強調している[45]。

一方で、羯南の侵略性を批判する研究も数多く発表された。安井達弥氏は、丸山氏が指摘したナショナリズムとリベラリズムの結合という思想的課題は、日清戦争後に彼が現実から疎外されたことによって、むしろ対外的には侵略的になったとした[46]。民族的自覚の観点から高木誠氏は羯南の条約改正論を分析したが[47]、高木氏も彼のナショナリズムに見られる危険性を主張した。鹿野政直氏も、「国民主義」という名の国粋主義は、権力が主導権を握った資本主義化の路線に巻き込まれ、日清戦争支持という破綻を迎えたとする[48]。また、鹿野氏は後に以下のように主張している[49]。ナショナリズムは、特に日本の場合、伝統と外来思想、国権と民権という近代化にあたっての最も根源的な課題と避け難く関わっている。この両者の緊張関係に身を置き、どちらか一方に傾斜して欧化主義や排外主義になることを羯南は避けていた。しかし、エモーショナルな感情であるナショナリズムは、国家への没入か反発かに人々を誘いやすいため、羯南の場合、歴史主義的・伝統主義的思考によって国家を強調する方向へと傾いたと鹿野氏は指摘する。

『羯南文録』には、対外論において平和主義的な主張も行なっている『国際論』が収録されているが、一方で、大日社版に収録された論説には、刊行された1938年の時節を反映して、大陸拡張策につながるような強硬なものばかりが編

44）　本山幸彦「明治前半期におけるアジア観の諸相」（『人文学報』第30号、1970年）。
45）　植手通有「陸羯南〈ナショナリズムと言論人〉」（朝日ジャーナル編『新版日本の思想家』上巻所収、朝日選書、1975年。初版は1962年刊）。
46）　安井達弥「陸羯南に於けるナショナリズム―歴史的背景との連関に於て―」（『東京大学教養学部社会科学紀要』第8輯、1958年）。
47）　高木誠「陸羯南と条約改正」（国際基督教大学社会科学研究所『社会科学ジャーナル』第4号、1962年）。
48）　鹿野政直「国粋主義における資本主義体制の構想」（『日本史研究』第52号、1961年）。
49）　鹿野政直「ナショナリストたちの肖像」（鹿野政直編『日本の名著37陸羯南・三宅雪嶺』所収、中央公論社、1984年）。

纂されていた。それが、この時期の研究に羯南の侵略性を批判するものが目立つ原因であると思われる。では、全集刊行以後に対外論研究は、どのような展開を見せたのであろうか。それを次節で検討していきたい。

2　全集刊行以後の研究

対外論研究も『全集』の刊行開始後、1970年代からさらに盛んになった。しかし、この時期も羯南の対外論を侵略的だとする説と平和主義と見る説は対立したままであった。

まず取り上げるのは、以後の研究に大きな影響力を持った坂野潤治氏である[50]。坂野氏の研究に従えば、「支那保全論」が民間の「対外硬」派の主張として定着したのは、1897年11月のドイツによる膠州湾占領、98年3月のロシアによる旅順・大連租借の前後である。この時期における羯南の対外論は、西洋による東洋の侵略を日本によるアジアの文明化で防ぐという「東洋盟主論」であり、日清戦争で日本が勝利したことにより、清国を対象としてはじめて成立した。この「東洋盟主論」は、日本により「独立及改革」を援助されることが韓国や清国にとって何を意味するかの想像力が欠けている点で、近衛篤麿や「脱亜論」(1885年)以前の福沢諭吉と共通していると坂野氏は論じる。羯南には、日本による文明化はアジアの植民地化をもたらさないという大前提があった。ただし、軍備拡張反対論を唱えながら、清国の独立と改革のために欧米と対決せよと主張しているのは明らかな矛盾である。「北守南進論」から「北進論」になり、その「北進論」が義和団事件後に直接「対露強硬論」になり、軍備拡張論に転換し、日英同盟の締結で帝国主義への評価も肯定的になり、支那保全論も、列強への中国分割への対抗論理から門戸開放論に変化したとされる。

坂野氏の研究は、東アジア国際政治の状況変化に応じて羯南の対外論がどのように変わっていったのかを、全集刊行によって可能になった羯南の対外論に関す

50)　坂野潤治「『東洋盟主論』と『脱亜入欧論』―明治中期アジア進出論の二類型―」(佐藤誠三郎、R・ディングマン編『近代日本の対外態度』所収、東京大学出版会、1974年)、坂野潤治『明治・思想の実像』(創文社、1977年)。

る論説を少なくとも当時の研究の中では最も体系的に分析したため、羯南がアジアに侵略的であったとする説の有力な根拠となった。

小寺正一氏は、羯南のナショナリズムは、理性的な民族意識に達しない民族感情であったため、何らかの外的衝撃や圧力を受けた場合には、非合理的・情緒的な色彩の濃い排他性を浮き上がらせ、日清戦争やアジアへの侵略的な言辞を行なうことになったと論じている[51]。また、穎原善徳氏は、欧米列強に対する民族的独立と民族間の対等性の主張では、丸山・本山両氏の説も一定の妥当性を有すが、対朝鮮政策論には膨張主義的侵略性が日清戦争後には顕著であるとする[52]。「東洋の平和」とは結局日本一国の平和に過ぎず、欧米列強からアジアを防衛するという言葉は、日本が清韓両国を侵略する口実であると論じて、羯南の対外論に平和主義的要素を見出す研究を厳しく批判した[53]。宮村氏は、日本の国際的上昇と対応しながら、羯南もアジアへの干渉を肯定する態度へ変わったことを[54]、また、山室信一氏は羯南が欧化主義・国際法への批判が強く、民族論を強調したことを[55]、全且煥氏は羯南の「国民主義」は国際観では平等と対等の論理ではなく、差別と排除の論理、侵略主義と植民地主義の論理になったことを批判しており[56]、羯南の侵略性を強調しているという意味では、坂野氏と同様の立場を採用している。

しかし、坂野氏やその影響を受けた研究者は日清戦争以後の羯南による言説を系統的に分析しているとは言えず、その結果、義和団事件後や日英同盟締結後に唱えられた強硬な対外論だけを強調しすぎていたため、一面的な議論であると批判することが出来よう。

51） 小寺正一「陸羯南の『国民旨義』―明治期のナショナリズム研究(1)―」（『京都教育大学紀要A（人文・社会）』第46号、1975年）、小寺正一「陸羯南の対外論―明治期のナショナリズム研究(2)―」（『京都教育大学紀要A（人文・社会）』第49号、1976年）。

52） 穎原善徳「日清戦後における陸羯南の対外政策論」（『日本歴史』第541号、1993年）。

53） 穎原善徳「日清戦争期日本の対外観」（『歴史学研究』第663号、1994年）。

54） 宮村、前掲論文。

55） 山室信一『思想課題としてのアジア―基軸・連鎖・投企―』（岩波書店、2001年）。

56） 全且煥「陸羯南の国際観」（西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』所収、柏書房、1999年）。

日清戦争後や義和団事件後に彼が「対露強硬論」になり、清国・韓国に対して侵略的になったとする遠山茂樹氏も同様の評価である[57]。ただし、遠山氏は、羯南と諭吉は国際平和主義を唱えた点で共通しながらも、各国の歴史や文化を重んじる羯南の思想は、「脱亜論」に転向した諭吉とは異なっており、日清戦前においては急激な対外侵略論を抑制させていたと指摘していた。興味深い説だが、その後予告されていた別稿が書かれなかったために史料的根拠に基づかない示唆にとどまり、羯南が具体的にどのように対外侵略論を抑制させていたのかについては深く分析されないままとなったことは惜しまれる[58]。

一方、日清戦争後も一種の国家平等論に基づく平和論が存在したとする研究者も存在する。田中浩氏は、彼を国際的平和主義者・自由民主主義から社会民主主義をつなぐリベラリストと評価している[59]。そして、羯南は国民不在の非自主的な鹿鳴館外交と軍備増強による武断外交政策を批判して、民権拡大による平和外交路線を選択すべきことを主張した。日清戦争後には、国内的には立憲制度の形骸化を阻止し、国際的には帝国主義（弱肉強食と軍備膨張）に反対して、経済的膨張の必要と万国平和会議の意義を強調したと論じた[60]。また、平和主義者・人権思想家・社会主義者とさえ見なす丸谷嘉徳氏は[61]、平和志向的な議論ばかりを強調しており、これらの研究も一面的な議論であると言わざるを得ない。

植手氏には、羯南の侵略論と平和主義論の分裂を描いた論文がある[62]。日清戦争後の羯南は、植手氏によると、一方でより立憲主義的・自由主義的な傾向を見

57）遠山茂樹「陸羯南の外政論―とくに日清戦争前後の時期を中心として」（『横浜市立大学論叢』第24巻第2・3号、1973年）。
58）遠山茂樹「福沢諭吉の啓蒙主義と陸羯南の歴史主義」（植手通有編『近代日本思想大系4陸羯南集』所収、筑摩書房、1987年。初出は、野原四郎・松本新八郎編『近代日本における歴史学の発達』上巻、青木書店、1976年）。
59）田中浩「日本におけるリベラリズムの一潮流―陸羯南・田口卯吉から長谷川如是閑へ―」（『一橋論叢』第97巻第2号、1987年）。
60）田中浩『近代日本と自由主義（リベラリズム）』第5章「『自由国民主義者』陸羯南―日本のアイデンティティとしての『日本主義』―」（岩波書店、1993年。初出は、「陸羯南」と題して、田中浩編『近代日本のジャーナリスト』に所収、御茶の水書房、1987年）。
61）丸谷嘉徳『陸羯南研究』（勁草出版サービスセンター、1990年）。
62）植手通有「解説―日清戦争後における陸羯南―」（植手編、前掲書所収）。

せ、軍備拡張と増税を批判する。政府と自由党は、国家と何かにつけて言うが、その「所謂る国家は、『人民』を取除きての国家」に他ならない。また羯南は、立憲君主制の議会政治運用を主張し、第二次松方内閣から軍部大臣武官制の廃止を主張する[63]。彼はすでに1898年から、ロシア皇帝ニコライ二世（Nicholai II）の提案した1899年の万国国際平和会議への支持を表明してもいた。しかし他方において、北守南進論の時から清国への貿易や移民を主張している。羯南の中では、欧米への平和主義と中国・朝鮮への強硬策が混在し、対外論は分裂していたと植手氏は結論づけている。豊富なエピソードが紹介されているのはさすがであるが、羯南の対外論がなぜ分裂していたのかについては言及がない。

そこで、最も注目すべきは羯南の対外論を包括的に捉えたほぼ唯一の研究である朴羊信氏の業績である[64]。羯南の対外論は、強硬な主張とリベラルな主張が共存しているため、大きく分裂した印象を与えるが、持続的に続いているモティーフがあった。それは、共同体の防衛と福祉という「公益」を対外的に図ることが第一義的に重要であったことであると朴氏は指摘する。朴氏によれば、時系列的な対外論の展開は以下のようになる。条約改正反対運動では、西洋列国による不平等条約からの完全「独立」を目指す主張であった。そして、西洋の「優勝劣敗」的な世界観に対して、各国はそれぞれ生存する権利を持つとされたので、アジア諸国と連帯する可能性は潜在的に存在した。しかし、自国民の利益、特に経済的膨張が優先されたため、朝鮮は独占的な勢力圏とされた。公益に反するので軍拡には一貫して反対したが、アジア主義の側面が徐々に強くなっていき、「自衛的

63） すでに慣習としてはあったが、制度としては第二次山県内閣の1900年5月に、陸海軍大臣は現役の大・中将に限るという陸海軍省官制改革がなされた。

64） 朴羊信「陸羯南の政治認識と対外論(1)〜(4・完）―公益と経済的膨張」（『北大法学論集』第49巻第1号、第49巻第2号、第49巻第5号、第50巻第1号、1998・1999年）。なお、山口一之氏も、長期間に渡り、羯南の対外論研究を行なっているが、事実の羅列のみで分析が欠如している。山口一之「日清戦争後における陸羯南の外政論(1)(2) ―明治28〜30年―」（『駒沢史学』第22号・第23号、1975・1976年）、山口一之「陸羯南の外政論―明治31〜33年―(1)(2)」（『駒沢史学』第27号・第28号、1980・1981年）、山口一之「陸羯南の外政論―義和団事変と善後策―」（『駒沢史学』第35号、1986年）、山口一之「陸羯南の外政論―明治34年1月〜4月―」（『駒沢史学』第38号、1988年）。

国民主義」から、日清戦争・中国分割期には「侵略的国民主義」に変化したのである。

この研究は非常に優れたものであるが、あえて疑問点を挙げれば、そこで言われている自国の「公益」や「経済的膨張」とはナショナリズムの側面が強いため、結果的に徐々に侵略論に傾いたという通説を大きく修正するものではないと思われる。

また、羯南の対外論を分析する上で、きわめて重要なのが彼の著作である『国際論』(1893年)である。にもかかわらず、『国際論』に関しては、この著書を論文の主題としている唯一の研究が、フランスの社会学者ノヴィコフ(Y. A. Novikov)の影響を明らかにして、ノヴィコフの社会進化論を採用しない部分があったことを詳細に検討しているものの、その後、この研究を発展させたものはない[65)]。

羯南の対外論は、『国際論』で示された国権論(ナショナリズム)、平和主義および国家平等主義(四海兄弟主義)、そして、東アジアにおけるパワー・ポリティカルな国際政治認識という4つの軸を据えない限り、体系的かつ立体的な分析は出来ないと考えられる。なぜならば、従来の研究はこのどれか一部分を強調することで羯南の対外論を規定するものがほとんどであったが、羯南自身の対外論が立体的な構造を持つものである以上、そのような一面的な議論ではもはや彼の実像に迫れないことは明らかだからだ。

---

65)　本田逸夫「明治中期の『国際政治学』―陸羯南『国際論』とNovicow J., *La politique internationale*をめぐって」(東北大学『法学』第59巻第6号、1996年)。なお、ノヴィコフ(1849-1912)とは、ロシア人とギリシア人の両親を持ち、主にフランスで活躍した社会学者である。大久保利謙「陸羯南の思想とその立場―特にその帝国主義観について―」(『歴史教育』第3巻第1号、1955年)は、『国際論』に注目した先駆的な業績だが、羯南は『国際論』で提示した自らの課題から逃避して、日清戦争後、帝国主義を肯定したと簡単に触れられているだけである。また、平石直昭「近代日本の『アジア主義』」(前掲、『アジアから考える[5]近代化像』所収)、松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』第Ⅴ章「文明論における『始造』と『独立』―『文明論之概略』とその前後―」(岩波書店、1993年。初出は、『北大法学論集』第31巻第3・4号、第33巻第3号、1981、1982年。後に加筆して、『福沢諭吉年鑑』第10号、1983年に収録)、375、394頁でも、『国際論』が「国際革命」を主張したことに触れている。

さらに、近年の研究を以下に紹介する。

世界の公論と平和の観点から、支那保全論、日英同盟論、満州共同開発案が羯南によって唱えられたとするのは小林啓治氏である[66]。羯南が中国分割を避けるため、満州共同開発・共同管理案を提起したことに注目して、分析している。ただし、義和団事件後と日英同盟締結後に唱えられた共同開発・中立化構想では朝鮮半島の扱いをめぐって相違がある点は指摘されていない。

平塚健太郎氏は、反帝国主義論を放棄して、軍事大国ではない経済進出によるイギリス流の帝国主義を目指すべきだとする論調に変わった転機として、南アフリカ戦争（いわゆるボーア戦争）が羯南に与えた影響を分析した[67]。国力不相応な軍事偏重という日本のネガティブな面をトランスヴァール共和国に見出したと主張するなど、従来の研究にはない独自の視点を提供しているが、羯南の対外論に見られる変化の主因を南ア戦争認識に還元するのはやや疑問である[68]。

19世紀後半から20世紀前半の世紀転換期における「アジア主義」に、重要な2つの潮流が現れたと平石直昭氏は指摘した[69]。1つは近衛篤麿が唱えた「東洋モンロー主義」であり、もう1つが岡倉天心の主張した「アジアは1つ」の理念で

66） 小林啓治「日英同盟締結と帝国日本」（木村和男編著『世紀転換期のイギリス帝国』所収、ミネルヴァ書房、2004年）。

67） 平塚健太郎「陸羯南と南アフリカ戦争―反『帝国主義』からの転換の契機として―」（『現代史研究』第48号、2003年）。

68） なお、軍国主義と帝国主義は同一ではないというのは、植手、前掲論文「解説―日清戦争後における陸羯南―」でも指摘されている。

69） 平石直昭「近代日本の国際秩序観と『アジア主義』」（東京大学社会科学研究所編『20世紀システム1構想と形成』所収、東京大学出版会、1998年）。

本稿では「アジア主義」を、竹内好氏を参考にして、「侵略を手段とするか否かを問わず、アジア諸国・諸民族連帯の指向を内包し、連帯の根拠は、欧米列強のアジア侵略に対抗するためにアジア諸国・諸民族は日本を盟主として団結すべきだと主張する思想」と定義する（竹内好「アジア主義の展望」、『現代日本思想体系第9巻アジア主義』所収、筑摩書房、1963年）。ただし、姜在彦『朝鮮近代史研究』（日本評論社、1970年）は侵略を手段とする連帯などないとして、アジア主義を評価する竹内氏を批判している。私も同感であるが、アジア主義者自身の認識の上では連帯意識が存在したため、この定義を採用する。彼らの評価は史料に基づいて批判的に検討する必要があると考える。

なお、平石氏は「アジア主義」を「欧米列強の支配干渉からアジアを解放するため、日本を盟主としてアジアの連帯を目指した思想」と定義している。

ある。

近衛は、「同文同種」であり、日本商品の販売市場、原料の供給地として清国を「領土保全」するために「東洋モンロー主義」を主張した。これには、「東洋」からのヨーロッパの排斥という面もあったが、基本的に防衛的な秩序維持構想であった。一方、岡倉の「アジア主義」は、アジアの各地域の文化には深い統一性があり、中国とインドの両文明を歴史上統一させてきた日本を、アジアの解放者として位置づけており、ヨーロッパに対して近衛より攻撃的な「アジア主義」を提唱したのである[70]。

では、平石氏の議論を踏まえると羯南はどのように位置づけることが出来るであろうか。羯南が岡倉の「攻撃的アジア主義」と異なるのは明らかだが、先行研究では同じ「支那保全論」としてまとめられることもあり[71]、関係も近かった近衛の「東洋モンロー主義」とも相違点はあるように思われる。なぜなら、羯南は義和団事件後や日英同盟締結後に、「満州開放・中立化構想」のような形でアジアにおいて欧米との協調も模索しており、清国・韓国／朝鮮に対しても「国家平等主義」を貫徹できないかという葛藤が見られるからである。「アジア主義」の中での位置づけを探っていくことも、羯南を研究する意義であろう。

松本三之介氏は、羯南の社会観について興味深い見解を示した[72]。羯南研究のほとんどが、国民の統一と独立という彼の政治的課題を中心とする内外の政治論に向けられていたとする。立憲政治論・条約改正論・藩閥政府批判などの政論

---

70)　ただし、平石氏も指摘しているように、岡倉は『日本の覚醒』において温和な表現で示し、激烈な主張を含んだ『東洋の覚醒』は生前公表しなかった。

71)　例えば、酒田正敏氏は、「東洋」システムをシステム外から防衛し、「東洋は東洋人の東洋なり」と羯南は言ったが、「東洋の平和」は結局「日本の平和」だったと評価している。酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』（東京大学出版会、1978年）。同書のもととなった論文は、酒田正敏「対外硬の運動（その1）～（その6）」（『東京都立大学法学会雑誌』第10巻第2号、第11巻第1号、第11巻第2号、第12巻第1号、第13巻第2号、第14巻第1号、1970～73年）である。

　また、李向英氏は、日清提携・貿易論から日清戦争時の義戦論を経て支那保全論に変化する1889年から1901年までの羯南の対清認識を研究した。李向英「陸羯南の対清認識―日清提携論から支那保全論へ―」（広島大学『史学研究』第243号、2004年）。

72)　松本、前掲書『明治思想における伝統と近代』第8章「陸羯南における『国家』と『社会』」（初出は、アジア太平洋研究会編 *The Journal of Pacific Asia* 1所収、世織書房、1993年）。

が、もっとも精彩を放ち、かつ影響力も大きかったので当然であるとしながらも、以下のように述べる。国民的特性―「国民主義」は「ナショナリチー」の訳語で、これは「国民（ネーション）なるものを基として他国民に対する独立特殊の性格を包含したるもの」であり、国民的特性の発達を通して初めて「世界の文明に力を致す」という「最終の目的」が可能になる。羯南の国民主義は、政治と文化、国家と社会という二元主義の上に構築されていた。「国家」は法律、制度、兵備、行政、租税、教育などの「政治上の生活」に、「社会」は文学、宗教、美術、技芸、風俗、家屋、衣服、儀式など「文化上の生活」に帰属しているとした。社会とは人びとが共同生活を営む中で歴史的に形づくられてきた風俗・習慣・儀礼・道徳感情・文芸など、伝統的で道徳的・情緒的・有機的な人間関係を中心とするものである。そして、社会は国民にとって国家よりも基底的なものと考えた。これが理解できると立憲政治論の理解も深まる。また、中国や朝鮮に対して、独自の文化を持つものとして、日本の法律・政治制度を押し付けることを諌めたのも、このような国民的特性・社会観によるのである。

羯南における国内政治論と国際政治論の関係を明らかにしようという重要な試みを行なったのは山辺春彦氏である[73]。羯南は、国家と社会の区別が彼の民主主義論の強みだったが、1902年頃から、清国には「国」がいらない、社会で自治が出来ると主張し始めた。平和を愛好し、自由を主義とする清国では、「国」が不要とされたことで、「門戸開放論」などの中国の主権制限論・租借・勢力圏確定の正当化に根拠を与えることになった。そこで、東アジアの連帯で中国・朝鮮の領土を可能な限り保全するが、中国・朝鮮の改革を政府・民間の支持で支援するという主張が生まれたとされる。松本氏とは異なり、国家と社会の区別が羯南の対外侵略論を正当化したと指摘しており、きわめて興味深い。

伊藤之雄氏は、多くの新聞の論調を追った研究の中で、羯南の中国・朝鮮認識を分析した。1891年の時点では、清国よりも積極的に欧化主義を唱えてきた日本だが、その成果は清国以下であると、主に軍事面での日本の遅れを嘆いていた。

73） 山辺春彦「陸羯南の交際論と政治像（上）（下）」（『東京都立大学法学会雑誌』第43巻第2号・第44巻第1号、2003年）。

このように、清国を強国と見て、ロシア・イギリスなど列強の動向に配慮して、日本独自で朝鮮に政治介入することを自制していた。しかし、日清戦争開戦前には日本の軍事力に自信を持つようになり、開戦論を唱えるようになったのである。近代化や文明化の基準は、軍備を中心とした国力にあったとする。定遠・鎮遠という当時最大級の軍艦を得た清国を評価し、軍事力の弱い朝鮮を未開国視したのは象徴的な事例であった[74]。日清戦争後は日本がアジアの盟主という意識が強まることになる[75]。伊藤氏は、同時代における新聞界全体の中に羯南の対外認識を位置づけるという大きな貢献を行なった。

ところで、羯南の対外論を研究する際、今までの研究では看過されてきた問題がある。それは、政治との距離のとり方、逆に言えば、政治的影響力についてである。羯南は「独立」した政論記者であるという認識が一般的であるため、この問題は研究されてこなかった観があるが、隣接分野の研究に従えば、以下のような例があった。例えば、佐々木隆氏の研究によると、1890年頃、羯南は品川弥二郎に資金援助を要請しているが、スクープ記事のリークに関係するなど、相互利用関係にあったのではないかと推測されている[76]。さらに、1892年の大津事件の際には、品川内相のもとで発行停止を免れており、第一次松方内閣の時は、伊藤を藤原氏と同一視する論説を発表したにもかかわらず、発行停止にならず、伊藤は不満を示したという。内閣機密金は使用されていないので、特定の政治勢力への支援ではないにしても、何らかの協力関係にはあったとされる。

また、1889年の条約改正問題以来、羯南は大隈に敵対的であったが、五百旗頭薫氏は、1892年頃から伊藤が天皇の「寵栄」を利用して、平安時代の藤原氏のような「威権」を振るうことに対して、伊藤に対抗できる唯一の「好敵手」と

---

74)　伊藤之雄「日清戦前の中国・朝鮮認識の形成と外交論」(古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』所収、京都大学人文科学研究所、1994年)。

75)　伊藤之雄「日清戦争以後の中国・朝鮮認識と外交論」(『名古屋大学文学部研究論集(史学)』第40号、1994年)、伊藤之雄「日露戦争以前の中国・朝鮮認識と外交論」(京都大学法学部百周年記念論文集刊行委員会編『京都大学百周年記念論文集』第1巻所収、有斐閣、1999年)。

76)　佐々木隆「第一次松方内閣期の新聞操縦問題」(『東京大学新聞研究所紀要』第31号、1983年)。

して羯南が大隈を挙げ、能力ある野党指導者というイメージを確立させたことを指摘している[77]。また、1896年の進歩党結成に際しても、比較的まとまりのある新党であると好意的な論調を寄せたともいう。

以上に挙げたような事例は、従来の思想史研究では看過されてきたと思われる。もっとも、短期的なある政治勢力への支援と羯南が信念・規範として持っていた中期的・長期的構想との相違は慎重に分析する必要があるのは言うまでもない。しかし、このような政治勢力との関係を視野に入れることで、羯南の言説をより正確に分析することが出来るのではないであろうか。

本節の議論をまとめると以下のようになる。

第一に、羯南の対外論は、侵略論と平和主義論が混在しており、相互に矛盾する議論も少なくないため、ある時期の対外論を捉えて対外論の特徴を理解したということは出来ない。たとえ、時期を絞って彼の言説を分析するにせよ、体外論全体の中での位置づけを考慮しないならば、その研究は正確さを欠くことになるであろう。

第二に、本節の中でも述べたように、羯南の対外論は、国権論（ナショナリズム）、平和主義および国家平等主義（四海兄弟主義）、そして、東アジアにおけるパワー・ポリティカルな国際政治認識という4つの軸を据えないと、体系的かつ立体的な分析は出来ないと考えられる。彼のナショナリズム論は、前章でも述べたように立憲政治論・国内政治論とも深く関わるので、国内政治論と国際政治論の関係を考察することも必要になってくる。また、東アジアにおける国家平等主義やパワー・ポリティカルな国際政治認識を分析する上では、アジア主義の中に羯南の対外論を位置づけることが大きな示唆を与えるであろう。

第三に、政治史研究の成果を取り入れることで、短期的なある政治勢力への支援を狙って書いた論説と、羯南が信念・規範として持っていた中期的・長期的構想に基づく論説の性格を良く見極めることが、彼の思想をより正確に捉えることにつながると考えられる。

77） 五百旗頭薫『大隈重信と政党政治 複数政党制の起源 明治十四年―大正三年』（東京大学出版会、2003年）。

Ⅳ　結論

本論文の結論は以下の通りである。

第一に、羯南の立憲政治観における近代的な要素と伝統的な要素という問題は重要であり、この研究を進めるためには各要素がどの程度、現状認識に基づくプラグマティックな戦略によるものなのか、ヨーロッパ思想の学習によるものなのか、親交のあった同時代人の影響によるものなのかを分析する必要がある。特に、従来はそれほど研究が進められていない他の知識人・新聞との比較は重要である。松田氏など少数の研究者は他紙との比較も行いながら羯南を時代の中に位置づける作業を行なっているが[78]、立憲政治論が同時代的にどれほど優れていたものだったのかについては、依然として明らかになっていない。

第二に、対外論研究は、前述したような多くの軸を使いながら、立体的で包括的な研究を行なうべきであると思われる。短い期間の史料をピンポイントで読解しても、混乱を招くばかりであるし、侵略主義や平和主義という先入観を捨てて、まずは実像をつかむべきであろう。羯南の言説が次第に侵略主義的になっていったことは事実であるが、それはなぜであったのかについて考察を深めなければ、これ以上の学問的貢献は望めないと思われる。

第三に、対外論であれ、国内政治論であれ、政治勢力との関係を常に念頭に置きながら研究を行なうべきであろう。国内政治状況における羯南の位置がわからないために、分析が歪む恐れがある。新聞史料だけでなく、公文書や外交史料、個人文書なども使用しながら研究を進める必要がある。

第四に、第一点とも関わるが、「国民主義」として同じ思想集団に属していた新聞記者たちとの比較研究も重要だ。相互の影響関係や思想的独自性を知らずしては、羯南の思想における独自性もつかむことは出来ないからである。

第五に、羯南の言説を理解する上で、長期的な構想と短期的な効果を狙った評論は、慎重に区別する必要があるということである。丸山氏は、政治や「政局」への関心を持っていた父の丸山幹治が「政論記者」で、政治を他の社会現象と相

---

78)　松田宏一郎「『政論記者』陸羯南の成立」(『東京都立大学法学会雑誌』第28巻第1号、1987年)

互連関的に、「文明として」とらえることで見方が非常に広くなっている長谷川如是閑を「文明批評家」と分類した[79]。「一貫して現実政治そのものに関心があった」と同時に[80]、如是閑に「文明批評家」として理想視された羯南は、「政論記者」と「文明批評家」の両方の資質を備えていたと評価できるであろう。そのような人物を研究する場合、前述のような作業は必要不可欠であると思われる。

以上のような問題点の提出は、過大な要求であるかもしれない。しかし、社会史研究で知られるジャック・ル・ゴフ（Jacques Le Goff）氏は伝記について、以下のように書いている[81]。伝記とは、「全体を構造的に1つの意味あるものとする」主題である。歴史家が歴史的知が拡がる地平のなかからその輪郭を浮かび上がらせる周囲の全体状況や、対象の領域全体を、そのまわりにもっと多くもっと具合よく結集させることができるものとして、人間以上のものを考えることができるであろうか。歴史家は、すべての領域について分析し、説明しなければならない。たとえ問題としている特定の個人について完璧に知りうることなどは「ユートピア的欲求」であるとしてもである。

伝記ではなく、人物研究でも念頭に置いておくべき言葉であろう。1人の歴史上の人物を知ろうとする場合、その人間が1つのことだけに関心を抱いているわけではなく、また、ある歴史的な時代に生きている以上、「周囲の全体状況や対象の領域」に関する知識なしには、本格的な研究を行なうことは出来ない。

ところで、羯南の先駆的な研究者である丸山氏は以下のようなことを言っている。「社会的・政治的問題の批評という場合に、『可能性の技術』という政治の側面を踏えてなお現実政治にべったりせず、ある程度の距離を不断に保つ批評という伝統は、どうも近代日本には少ない[82]」。また、「日本に保守主義が知的および

79） 飯田泰三・掛川トミ子・丸山眞男・三谷太一郎・山領健二（座談会）「如是閑の時代と思想―丸山眞男氏に聞く―」（『丸山眞男座談』第9巻所収、岩波書店、1998年。初出は、『如是閑文藝選集』月報1～4、岩波書店、1990・1991年）、216-217頁。

80） 同上、223頁に見られる三谷太一郎氏の評価。

81） ジャック・ル・ゴフ（岡崎敦・森本英夫・堀田郷弘訳）『聖王ルイ』（新評論、2001年。原著は、Jacques Le Goff, *Saint Louis*, Paris, Gallimard, 1996）、20-21頁。

82） 丸山・西田・植手、前掲座談会「近代日本と陸羯南」。

政治的伝統としてほとんど根付かなかったことが、一方進歩『イズム』の風びに比して進歩勢力の弱さ、他方保守主義なき『保守』勢力の根強さという逆説を生む一因をなしている」というよく知られた言葉もある[83]。丸山氏は反動ではない真の保守との対話が、保守にも革新にも必要だと言っていたのではないのであろうか。本稿で主題としたナショナリズムは、パンドラの箱のようなもので、近い将来になくすことは出来ないし、それが望ましいことでもないかもしれない。しかし、ナショナリズムとインターナショナリズムの問題は、戦争とも結びつく重要な問題である。

本稿で取り上げた陸羯南は、ヨーロッパの近代思想を吸収しつつ、彼なりに伝統を重んじたのであり、また、日本の「国益」を重視し侵略的な言論に次第に傾きながらも、平和主義やアジア主義との葛藤を抱えた人物でもあった。前述したように彼の示した保守性や侵略的な言説には批判すべき点も存在するが、その葛藤は、近代日本の歩みを象徴するかのようであり、また現代の日本を考える意味でも示唆するところがあろう。その意味では、ナショナリズムや対外認識を考察する上で、近代日本を代表する「保守主義者」である羯南との対話を通して、自らの思想を鍛えていくことは今なお必要である。

【付記】本稿は、一橋大学21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」による研究成果の一部である。記して感謝申し上げる。

陸羯南研究文献リスト（関連文献も含む）

・相澤文蔵「明治の人々―陸かつ南おぼえがき」（『道標』第24号、1965年）
・相澤文蔵「陸羯南」（弘前市立弘前図書館編『郷土の先人を語る1』所収、弘前市立弘前図書館、1967年）
・有山輝雄『徳富蘇峰と国民新聞』（吉川弘文館、1992年）

83）丸山眞男「反動の概念」（『丸山眞男集』第9巻所収、岩波書店、1996年。初出は、『岩波講座・現代思想Ⅴ』所収、岩波書店、1957年）。

・五百旗頭薫『大隈重信と政党政治　複数政党制の起源　明治十四年―大正三年』（東京大学出版会、2003年）
・石川一三夫「陸羯南の名望家自治論―法史学の課題を求めて―」（『法制史研究』第40号、1991年）
・石田雄『日本近代思想史における法と政治』第4章「日本における『合法性』成立過程の一特質」（岩波書店、1976年。初出は、仁井田陞博士追悼論文集編集委員会編『仁井田陞博士追悼論文集第3巻日本法とアジア』所収、勁草書房、1970年）
・伊藤之雄「日清戦前の中国・朝鮮認識の形成と外交論」（古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』所収、京都大学人文科学研究所、1994年）
・伊藤之雄「日清戦争以後の中国・朝鮮認識と外交論」（『名古屋大学文学部研究論集（史学）』第40号、1994年）
・伊藤之雄「日露戦争以前の中国・朝鮮認識と外交論」（京都大学法学部百周年記念論文集刊行委員会編『京都大学百周年記念論文集』第1巻所収、有斐閣、1999年）
・稲葉克夫『青森県近代史の群像』（北の街社、1985年）
・稲葉克夫『青森県の近代精神』第2部（北の街社、1992年。初出は、「羯南聞書」が『弘前大学国史研究』第15・16合併号、1959年、「羯南と徴兵のがれ」が『日本歴史』第187号、1963年、「陸羯南の紋別行―寒帆餘影を資料として」が『弘前大学国史研究』第59号、1972年、「陸羯南の精神的転機にあずかる人々」が『瞬星』第5号、1964年、「羯南とジョセフ・ド・メーストル」が『散歩通信』第8・9号、1978年、「羯南と無神経事件」が『東奥日報』1962年8月29日、「無神経事件の前哨戦」が『陸奥新報』1967年10月15日、「羯南の条約改正論」が『弘前大学国史研究』第7・8号、1957年、「条約改正における井上外交の論理とその支柱的条件の考察」が『弘前大学国史研究』第33・34号、1963年、「羯南と遼東半島還付責任論」が『東奥文化』第36号、1968年）
・稲葉克夫「陸羯南における津軽　国民主義思想形成の基盤」（『三潮』第30号、2006年）
・岩井忠熊「国粋主義の成立」（『日本史研究』第47号、1960年）

・岩瀬昌登「明治二十年代における伝統主義の性格―陸羯南について―」(『日本歴史』第205号、1965年)
・植手通有「史論としての『近時政論考』」(岩波文庫版『近時政論考』に所収、1972年)
・植手通有「陸羯南〈ナショナリズムと言論人〉」(朝日ジャーナル編『新版日本の思想家』上巻所収、朝日選書、1975年。初版は1962年刊)
・植手通有「平民主義と国民主義」(『岩波講座・日本歴史16近代3』所収、岩波書店、1976年)
・植手通有「『國民之友』・『日本人』」(松本三之介編『明治文学全集37政教社文学集』所収、筑摩書房、1980年。初出は、「国民之友・日本人―日本の思想雑誌―」として、『思想』第453号、1962年に発表)
・植手通有「解説―日清戦争後における陸羯南―」(植手通有編『近代日本思想大系4陸羯南集』所収、筑摩書房、1987年)
・梅溪昇「陸羯南宛犬養毅・井上毅・近衛篤麿・内藤鳴雪の書簡―『羯南全集』への補遺―」(『日本歴史』第545号、1993年)
・穎原善徳「日清戦後における陸羯南の対外政策論」(『日本歴史』第541号、1993年)
・穎原善徳「日清戦争期日本の対外観」(『歴史学研究』第663号、1994年)
・大久保利謙「陸羯南の思想とその立場―特にその帝国主義観について―」(『歴史教育』第3巻第1号、1955年)
・岡義武「日清戦争と当時における対外意識」(『岡義武著作集第6巻国民的独立と国家理性』所収、岩波書店、1993年。初出は、『国家学会雑誌』第63巻第3・4号、第63巻第5・6号、1954、1955年)
・岡和田常忠「陸羯南とジョゼフ・ド・メーストル」(『みすず』第112号、1968年)
・梶井盛編『羯南文集』(東京蟠龍堂、1910年)
・鹿野政直「国粋主義における資本主義体制の構想」(『日本史研究』第52号、1961年)
・鹿野政直「ナショナリストたちの肖像」(鹿野政直編『日本の名著37陸羯南・三宅雪嶺』所収、中央公論社、1984年)

・川邊眞藏『報道の先駆者 羯南と蘇峰』（三省堂、1943年）
・川村欽吾「『拓川日記』と陸羯南」（『東奥義塾研究紀要』第５集、1970年）
・川村欽吾「伊藤重と陸羯南」（『東奥義塾研究紀要』第６集、1972年）
・川村欽吾「赤石定蔵と陸羯南」（『東奥義塾研究紀要』第７集、1973年）
・川村欽吾「明治の津軽びと―陸羯南（一）～（一五）」（『れぢおん青森』、1981年１月～1982年３月）
・木野主計「日本主義時代の国史への省察―陸羯南と井上毅―」（『歴史教育』第18巻第１号、1970年）
・木村毅・柳田泉・西田長寿（座談会）「陸羯南とその周辺」（『みすず』第112号、1968年）
・陸羯南研究誌発行委員会『陸羯南―その人と思想―』創刊号（陸羯南研究誌発行委員会、2004年）
・古賀鶴松「陸羯南の政治思想」（『富士論叢』第10巻、1965年）
・小寺正一「陸羯南の『国民旨義』―明治期のナショナリズム研究⑴―」（『京都教育大学紀要Ａ（人文・社会）』第46号、1975年）
・小寺正一「陸羯南の対外論―明治期のナショナリズム研究⑵―」（『京都教育大学紀要Ａ（人文・社会）』第49号、1976年）
・小林和幸『明治立憲政治と貴族院』（吉川弘文館、2002年）
・小林啓治「日英同盟締結と帝国日本」（木村和男編著『世紀転換期のイギリス帝国』所収、ミネルヴァ書房、2004年）
・小股憲明「近代日本のナショナリズム―陸羯南の場合」（『社会福祉評論』第47号、1980年）
・小松茂夫『歴史と哲学との対話―同時代批判の視座を求めて―』第２章「近代日本思想における伝統主義の問題―日本主義に即しつつ―」（平凡社、1974年。初出は、「近代日本における『伝統』主義―『日本主義』を中心として―」と題して、『近代日本思想史講座第７巻近代化と伝統』に所収、筑摩書房、1959年）
・小松茂夫「陸羯南―『国民』国家における『新聞記者』の使命」（小松茂夫・田中浩編『日本の国家思想』上巻所収、青木書店、1980年）
・小山文雄『陸羯南 「国民」の創出』（みすず書房、1990年）

・坂井雄吉「近衛篤麿と明治三十年代の対外硬派―『近衛篤麿日記』によせて―」（『国家学会雑誌』第83巻第3・4合併号、1970年）
・坂井雄吉「明治憲法と伝統的国家観―立憲主義の国体観をめぐって―」（石井紫郎編『日本近代法史講義』所収、青林書院新社、1972年）
・坂井雄吉「陸羯南」（『言論は日本を動かす第4巻日本を発見する』所収、講談社、1986年）
・坂井雄吉「陸羯南と地方自治」（『大東法学』第10巻特別号、2001年）
・坂井雄吉「『国民論派』の使命(1)(2)(3) ―陸羯南の初期政論をめぐって―」（『大東法学』第15巻第1号、第15巻第2号、第16巻第1号、2005・2006年）
・酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』（東京大学出版会、1978年）。同書のもととなった論文は、酒田正敏「対外硬の運動（その1）～（その6）」（『東京都立大学法学会雑誌』第10巻第2号、第11巻第1号、第11巻第2号、第12巻第1号、第13巻第2号、第14巻第1号、1970～73年）
・佐々木隆「第一次松方内閣期の新聞操縦問題」（『東京大学新聞研究所紀要』第31号、1983年）
・佐々木隆『メディアと権力』（中央公論新社、1999年）
・定平元四良「陸羯南の宗教論」（『関西学院大学社会学部紀要』第37号、1978年）
・佐藤能丸編「年譜」「参考文献」「政教社文学年表」（松本三之介編『明治文学全集37政教社文学集』所収、筑摩書房、1980年）
・佐藤能丸「国民意識の形成―国粋主義における国民像の構想を中心にして―」（鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗』第1巻所収、日本評論社、1982年）
・佐藤能丸『明治ナショナリズムの研究―政教社の成立とその周辺―』（芙蓉書房出版、1998年）
・佐藤能丸「『国民主義』陸羯南」（『志立の明治人』下巻、芙蓉書房出版、2005年）
・澁谷浩「陸羯南のナショナリズム論―政治思想史的考察―」（『明治学院論叢法学研究』第37巻、1986年）
・澁谷浩「陸羯南の政治批評の論理」（『保守政治の論理』所収、北樹出版、1994年）

・清水靖久「20世紀初頭日本の帝国主義論」（『比較社会文化』第6巻、2000年）
・鈴木虎雄輯『羯南文録』（非売品、1933年）
・鈴木虎雄輯『羯南文録』（大日社、1938年）
・鈴木啓孝「司法省法学校『放廃社』にみる個人と結社―陸羯南と原敬を中心に―」（『日本思想史学』第36号、2004年）
・鈴木啓孝「旧藩の超越―明治10年代の陸羯南を題材として―」（東北史学会『歴史』第106輯、2006年）
・高木誠「陸羯南と条約改正」（国際基督教大学社会科学研究所『社会科学ジャーナル』第4号、1962年）
・高松亨明『陸羯南詩通釈』（津軽書房、1981年）
・翟新『東亜同文会と中国―近代日本における対外理念とその実践』（慶應義塾大学出版会、2001年）
・田中浩「日本におけるリベラリズムの一潮流―陸羯南・田口卯吉から長谷川如是閑へ―」（『一橋論叢』第97巻第2号、1987年）
・田中浩『近代日本と自由主義（リベラリズム）』第5章「『自由国民主義者』陸羯南―日本のアイデンティティとしての『日本主義』―」（岩波書店、1993年。初出は、「陸羯南」と題して、田中浩編『近代日本のジャーナリスト』に所収、御茶の水書房、1987年）
・田畑忍「陸羯南の政治思想」（『同志社法学』第4号、1950年）
・胆紅「陸羯南と新聞『日本』のアジア論―日清戦争まで―」（『国際公共政策研究』第9巻第2号、2005年）
・全且煥「陸羯南の国際観」（西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』所収、柏書房、1999年）
・遠山茂樹「陸羯南の外政論―とくに日清戦争前後の時期を中心として」（『横浜市立大学論叢』第24巻第2・3号、1973年）
・遠山茂樹「福沢諭吉の啓蒙主義と陸羯南の歴史主義」（植手通有編『近代日本思想大系4陸羯南集』所収、筑摩書房、1987年。初出は、野原四郎・松本新八郎編『近代日本における歴史学の発達』上巻、青木書店、1976年）
・中野目徹『政教社の研究』（思文閣出版、1993年）

・中村春作「明治期ナショナリズムと『アジア』」(西村清和・高橋文博編『近代日本の成立―西洋経験と伝統―』所収、ナカニシヤ出版、2005年)
・西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』(至文堂、1961年)
・西田長寿・植手通有編『陸羯南全集』全10巻(みすず書房、1968～72、75、85年)
・野田良之「ボワソナードと陸羯南」(『法学志林』第71巻第2・3・4合併号、1974年)
・ケネス・B・パイル(松本三之介監訳、五十嵐暁郎訳)『新世代の国家像―明治における欧化と国粋―』(社会思想社、1986年。原著は、Kenneth B. Pyle, *The New Generation In Meiji Japan : Problems of Cultural Identity 1885-1895*, Stanford University Press, 1969)
・芳賀登「『日本人』の解説」(復刻『日本人』34、日本図書センター、1984年)
・朴羊信「陸羯南の政治認識と対外論(1)～(4・完)―公益と経済的膨張」(『北大法学論集』第49巻第1号、第49巻第2号、第49巻第5号、第50巻第1号、1998・1999年)
・波多野勝「北清事変以後における体外硬運動の展開(1)(2・完)」(『法学研究』第54巻第9号、第54巻第10号、1981年)
・坂野潤治『明治憲法体制の確立―富国強兵と民力休養―』(東京大学出版会、1971年)
・坂野潤治「『東洋盟主論』と『脱亜入欧論』―明治中期アジア進出論の二類型―」(佐藤誠三郎、R・ディングマン編『近代日本の対外態度』所収、東京大学出版会、1974年)
・坂野潤治『明治・思想の実像』(創文社、1977年)
・平石直昭「近代日本の『アジア主義』」(溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える[5]近代化像』所収、東京大学出版会、1994年)
・平石直昭「近代日本の国際秩序観と『アジア主義』」(東京大学社会科学研究所編『20世紀システム1構想と形成』所収、東京大学出版会、1998年)
・平田小六「陸羯南　その剛毅なもの(上)(中)(下)」(『日本及日本人』1469・1471・1473号、1969年1・3・5月)

・平塚健太郎「陸羯南と南アフリカ戦争―反『帝国主義』からの転換の契機として―」（『現代史研究』第48号、2003年）
・広瀬玲子『国粋主義者の国際認識と国家構想―福本日南を中心として―』（芙蓉書房出版、2004年）
・ひろたまさき「陸羯南論―そのナショナリズムの論理―」（『北海道教育大学紀要第一部B. 社会科学編』第17巻第1号、1966年）
・古川江里子『大衆社会化と知識人―長谷川如是閑とその時代―』（芙蓉書房出版、2004年）
・本田逸夫「陸羯南の政治思想―日清戦前の時期を中心として― ⑴～⑶」（『法学』第51巻第1・2号、第52巻第2号、1987・1988年）
・本田逸夫「明治憲法の制定と陸羯南―陸羯南の立憲政論に関する覚え書き―」（『九州工業大学研究報告（人文・社会科学）』第39号、1991年）
・本田逸夫「陸羯南の『人道』観に関する覚え書き」（『政治研究』第40号、1993年）
・本田逸夫「『立憲政体の冷熱』―陸羯南の立憲政観」（『法の理論』第12巻、1993年）
・本田逸夫「陸羯南の立憲政論の展開―日清戦後の時期を中心に」（『九州工業大学研究報告（人文・社会科学）』第41号、1993年）
・本田逸夫『国民・自由・憲政―陸羯南の政治思想―』（木鐸社、1994年）
・本田逸夫「明治中期の『国際政治学』―陸羯南『国際論』とNovicow J., *La politique internationale*をめぐって」（東北大学『法学』第59巻第6号、1996年）
・本田逸夫「陸羯南の『国民的特性』論―その『自由主義』論との関連を中心に―」（『政治研究』第45号、1998年）
・本田逸夫「近代日本の自由観に関するノート―福沢諭吉らをめぐって―」（『九州工業大学研究報告（人文・社会科学）』第50号、2002年）
・前島省三「明治中期のナショナリズム」（河出書房編集部編『日本のナショナリズム―展開と頽廃―』所収、河出書房、1953年）
・松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』（岩波書店、1993年）
・松田宏一郎「『政論記者』陸羯南の成立」（『東京都立大学法学会雑誌』第28巻

第1号、1987年)
・松田宏一郎「『近時政論考』考(一)(二・完)―陸羯南における《政論》の方法―」(『東京都立大学法学会雑誌』第33巻第1号、第33巻第2号、1992年)
・松本喜代子「陸羯南小論―明治二十年代ナショナリズムの一形態」(『立命館文学』第115号、1954年)
・松本三之介『近代日本の政治と人間―その思想史的考察―』第4章「明治前期の保守主義思想」(創文社、1966年。初出は、「明治前期保守主義思想の一断面―政治と道徳の問題を中心に―」として、坂田吉雄編『明治前半期のナショナリズム』に所収、未来社、1958年)
・松本三之介「解説」(松本三之介編『近代日本思想大系31明治思想集Ⅱ』所収、筑摩書房、1977年。後に再構成されて松本三之介『明治思想史　近代国家の創設から個の覚醒まで』、新曜社、1996年に収録)
・松本三之介『明治精神の構造』第Ⅵ章「国粋主義の国家像―政教社の人びと」(岩波書店・同時代ライブラリー、1993年。初版は、日本放送出版協会より、1981年に刊行)
・松本三之介『明治思想における伝統と近代』第7章「政教者―人と思想―」(東京大学出版会、1996年。初出は、「解題」として松本三之介編『明治文学全集37政教社文学集』に所収、筑摩書房、1980年)
・松本三之介『明治思想における伝統と近代』第8章「陸羯南における『国家』と『社会』」(東京大学出版会、1996年。初出は、アジア太平洋研究会編 *The Journal of Pacific Asia* 1所収、世織書房、1993年)
・丸谷嘉徳『陸羯南研究』(勁草出版サービスセンター、1990年)
・丸山眞男「陸羯南―人と思想」(『丸山眞男集』第3巻所収、岩波書店、1995年刊。「陸羯南と国民主義」と改題して、明治史料研究連絡会編『民権論からナショナリズムへ』、御茶の水書房、1957年および、丸山眞男『戦中と戦後の間』、みすず書房、1976年に収録。初出は、『中央公論』1947年2月号)
・丸山眞男・西田長寿・植手通有(座談会)「近代日本と陸羯南」(『丸山眞男座談』第7巻所収、岩波書店、1998年。初出は、『みすず』第112号、1968年)
・宮田昌明「陸羯南『近時政論考』」(大塚健洋編著『近代日本政治思想史入門―

原典で学ぶ19の思想―』所収、ミネルヴァ書房、1999年）
・宮村治雄「自由主義如何―陸羯南の政治思想」（『開国経験の思想史　兆民と時代精神』所収、東京大学出版会、1996年。初出は、溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える［5］近代化像』所収、東京大学出版会、1994年）
・本山幸彦「明治二十年代の政論に現れたナショナリズム―陸羯南・三宅雪嶺・志賀重昂の場合―」（坂田吉雄編『明治前半期のナショナリズム』所収、未来社、1958年。後に本山幸彦『明治思想の形成』に収録、福村出版、1969年）
・本山幸彦「明治前半期におけるアジア観の諸相」（『人文学報』第30号、1970年）
・本山幸彦「明治の新聞記者―陸羯南」（日本文化会議編『日本におけるジャーナリズムの特質』所収、研究社、1973年）
・安井達弥「陸羯南に於けるナショナリズム―歴史的背景との連関に於て―」（『東京大学教養学部社会科学紀要』第８輯、1958年）
・柳田泉「陸羯南」（『三代言論人集第５巻田口卯吉・陸羯南・三宅雪嶺』所収、時事通信社、1963年）
・山口一之「日清戦争後における陸羯南の外政論(1)(2)―明治28～30年―」（『駒沢史学』第22号・第23号、1975・1976年）
・山口一之「陸羯南の外政論―明治31～33年―(1)(2)」（『駒沢史学』第27号・第28号、1980・1981年）
・山口一之「陸羯南の外政論―義和団事変と善後策―」（『駒沢史学』第35号、1986年）
・山口一之「陸羯南の外政論―明治34年１月～４月―」（『駒沢史学』第38号、1988年）
・山田央子『明治政党論史』（創文社、1999年）
・山辺春彦「陸羯南の交際論と政治像（上）（下）」（『東京都立大学法学会雑誌』第43巻第２号・第44巻第１号、2003年）
・山辺春彦「明治立憲政と徳義―合川正道と陸羯南の立憲政治構想―」（『東京都立大学法学会雑誌』第45巻第１号、2004年）
・山本隆基「陸羯南の初期政論」（『広島法学』第６巻第３号、1983年）

・山本隆基「陸羯南の思惟方法」(『広島法学』第11巻第3・4合併号、1988年)
・山本隆基「陸羯南における国民主義の制度構想(1)〜(6)」(『福岡大学法学論叢』第48巻第3・4号、第49巻第1号、第49巻第2号、第49巻第3・4号、第50巻第2号、第50巻第3号、2004・2005年)
・山本武利「明治三十年代前半の新聞『日本』の読者層―知識人読者の新聞観をめぐって―」(松本三之介編『明治文学全集37政教社文学集』所収、筑摩書房、1980年。後に、山本武利『近代日本の新聞読者層』、法政大学出版局、1981年にも収録。初出は、『一橋論叢』第58巻第4号、1967年)
・山本武利『新聞と民衆』(紀伊國屋書店、復刻版1994年刊。初版は1973年刊)
・山本武利『新聞記者の誕生　日本のメディアをつくった人びと』(新曜社、1990年)
・山室信一『近代日本の知と政治―井上毅から大衆演芸まで』(木鐸社、1985年)
・山室信一「国民国家・日本の発現―ナショナリティの立論構成をめぐって―」(『人文学報』第67号、1990年)
・山室信一『思想課題としてのアジア―基軸・連鎖・投企―』(岩波書店、2001年)
・吉田義次『國士陸羯南』(昭和刊行会、1944年)
・米原謙「日本における近代保守主義の成立とその特質―陸羯南の立憲政論―」(『阪大法学』第104号、1977年)
・米原謙「ナショナリズムの思想―陸羯南」(宮本盛太郎編『近代日本政治思想の座標　思想家・政治家たちの対外観』所収、有斐閣選書、1987年)
・李向英「陸羯南の対清認識―日清提携論から支那保全論へ―」(広島大学『史学研究』第243号、2004年)